

---

# 天の川が見えた8月

中野柚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天の川が見えた8月

### 【Nコード】

N4447V

### 【作者名】

中野柚

### 【あらすじ】

それは8月にだけ現れる、夢の天の川…

会ったたびに織姫を忘れる彦星と彦星を想い続ける織姫の切ない恋…

まあだんだんと切なくなっていくけどねっ BY主人公（女）

え…！？いや…まだはつきりと最後まで決めてないんですけどBY主人公（男）

”君”が夢に現れるのは8月。”君”は私と毎回会っているのに、いつも私のことを忘れている。

最初はそれがすごく寂しかった。でも、そのうちだんだんと慣れてきてしまった。

今はもうそんなことで落ち込んで時間を無駄にしないようにして、いっぱい君と話している。

でも…やっぱり起きている時は今でも落ち込んでいるんだ…

少女side -

「…ねえ、ちゃんと聞いてんの!？」

「ん? あー…まあ……。」

「せっかく人が本当のことを教えてあげてんのに……」

「だって…僕たちさつき会ったばかりなのにいきなりそんなこと言われたって……」

「…違うよ…。私たちが会ったのはこれで65回目だよ……」

だって今は8月3日。私達が会ったのは3年前。  
この話をしたのは63回。最初に会ったときは本当にはじめましてだったし、2回目はデジャブなのかと思うと頑張っていたから……

「でも例えそうだとしても証拠はないじゃん。」

「でも!…!でも……」

信じて欲しくてなにか言おうと考えていたそのとき、また”君”は私の夢の中から消えた…。

- 少年 s i d e -

小鳥が鳴いている。母さんは今日も朝早くからパンを焼いているのだろう。香ばしい匂いがする。

「うん、今日もいい天気だ。」

8月はいつも寝覚めがさっぱりする。なんでだろう？

僕が8月が大好きだからかな？

なんで？そりゃあ8月はもうオール夏休みと言っていていい月だし。

月・・・だし・・・あと・・・なんだろう？

それだけなんだけど・・・なのに僕はすごく8月が好きなんだ。

・・・そうだ！！いきなり話を変えるけど、僕には宝物があるんだ。昔・  
・といつても3年くらい前、7月7日の七夕の日。お祭りの屋台で  
プレスレットを買った。それはとても綺麗な色をしていて、一目見て僕は  
そのプレスレットを買った。女っぽいて友達から言われたけどそんなの全然  
気にならなかった。そんな友達の言葉よりもプレスレットの美しさに魅入って  
いたんだ。それは僕の一番大事なものだからいつとも身に付けている。今日も  
それを手につけて僕は図書館まで自転車をこいでいく。ハズだったんだけど……

- 少女 s i d e -

朝。私は気だるく起き上がる。

はあ・・・また今日も・・・いや昨日も・・・か・・・信じてもらえなかった。

「全く・・・いい加減信じなさいよっつのっ!!」

思わず、両腕を振り上げて人形に枕を投げつけてしまった。

その衝動で腕のプレスレットがかすかに揺れる。これは3年前の7月7日にもらったものだった。といつても、そのときに母がアクセサリーの多い屋台を出していて手伝いをしてくれたら売れ残ったアクセサリーをひとつだけくれるというので頑張って働いてもらった

のだ。いわば、人生最初の給料みたいなものだ。  
と言っても、今の私はまだ高校生なので、まだ、給料なんぞもらったことはないのだが…。

ま、そういうことで私は今日も走ってパン屋まで行く。あそこのおばちゃんには小さい頃からいろいろとお世話になっていろいろとオマケしてもらっているのだ。だから私の行きつけはあそこなのだ。

よし!! 今日頑張って一日行くぞー!!

・

パン屋につくと、店の前で男の子が自転車の近くでなにかをしていた。

パンクでもしたのだろうか…そう思いながら男の子の横を通ってパン屋に入ろうとすると…

「ねえ、君…あの…そのブレスレット…えっと…どこかで拾った…の…?」

「…は!?!? なに言ってるの!?!? これは昔、母からもらったのよ!」  
なんだ!?! コイツ…!! いきなり人のブレスレット指差して…

もつと文句言ってるのかと思ってソイツの顔を見ると…

ソイツは夢の中の”君”に似ていた…

No. 01    Z w e i    B e h a r r l i c h k e i t (前書き)

母からもらった(?)ブレスレットをいきなり拾ったのかと聞かれてムカついた主人公(女)。相手の顔を見て文句を言っでやろうとみるとその顔は夢の中に出てくる”君”の顔にそっくりで…!!?

## No. 01 Zwei Beharrlichkeit

「あ…そうですか…すみません…。僕がもっていたものによく似ていたんで…」

そういつていきなり謝ってきたソイツ。やっぱり似ている…

「…もういいわ。それよりアンタ！名前は何？」

「あ…僕ですか…？僕は弘人<sup>ひろと</sup>。弘人<sup>ひろと</sup>って言います…！…あなたは…？」

「私は風乃<sup>なぎの</sup>。宇野<sup>うの</sup> 風乃<sup>なぎの</sup>っていうの。」

…って言ってもあなたはきつと明日には忘れているのかな…でもこれは現実…なら、もしかしたら…！！

「あ、あの風乃さん…」

「呼び捨てでいいよ、大体、同年ぐらいじゃない。」

「あ、はい。じゃあ…風乃…、そのブレスレットと似たやつを近くで見なかった…？」

「見てないけど…あなたも持ってるの…？…ってことは昔にお祭りの屋台で買った…？？」

「え…あ、あの…」

ドギマギしてる…ってことは買ったけど、男の子がこんな女っぽいものを持ったら恥ずかしいと思ってるのかww

「ここらへんで落としたの？」

「はい…。図書館に行く途中だったんですけど…。」

「…探すの手伝ってあげる…。」

「…！！ありがとうございます…！！」

そうしてだんだんと時間が経っていき、お昼近くになった。  
、と…

「あ…！あつた！ありましたよ！風乃…！見て！ほら…！」  
振り向くととても嬉しそうな弘人の顔が近くにあった。

思わず赤面しそうになって顔を横に向けながらも私は、

「よかったじゃない。」

そう言うことはなんとかできた。

そしてそのブレスレットを間近で見ると…私のとよく似ている。

もしかしたらこのブレスレットが私たちを会わせてくれたのかもしれない！！

お母さん！！あなたにもらった（給料…いや）ブレスレットはもう最高です！！

そうお母さんを崇めていると…

「手伝ってくださってありがとうございます！！もしよろしければ家でお昼ご飯を食べていきませんか？」

「え…いや…ぐぐぎゆるきゆるうつ…お願いします。」

お腹は正直だった…くそっ／＼弘人君は笑ってしまうのをこらえようと必死に頑張っていた…



No. 02 Sie wer erinnern nicht daran (昔)

こうして家に帰った私は夜になり眠る

「あー！弘人君！」

「…どうして僕の名前を知っているんだい？」

「え…だってお昼会ったじゃない、それにご馳走になったし…」

「……人違いじゃないかな？…だって僕は今日、自転車がパンクしていてしょうがなく歩いて図書館に行って…うん、やっぱり君みたいな人には会ってないよ。」

「え…？いや…でも、ほらそのブレスレット！私とおそろいの…！  
！それなくしてたじゃん！？」

「いや、これはなくすはずがない！だっていつも手につけているんだ、無くすはずがない。それになぜ君は僕と同じものを？これはあの時… - - - - -」

弘人君の言葉が頭に入ってこない…。現実であつたのだから今度は覚えている…そう思っていた私には痛い仕打ちだった…。

そんな…夢の中のことだから忘れているとしか思っていなかった…  
また明日、現実の弘人君に会って…

それで私のことを覚えているか訪ねて…？できるかな…だってもし現実の弘人君も私を忘れていたとしたらそれは辛すぎる…。

「あ…いいや、また…ね…。」

「- - - - -」

弘人がなにか言っている、でもそれは私の頭には入ってこず、朝の光の方が私の眼に入ってきた…

「弘人君に会わなきゃ…！…会って話を聞かなきゃ…」

私のこと忘れていないよね…！…って…？ふふっ…いきなりそんなこ

と聞いてもし覚えてなかったらどうするの？

もう一人の私の声が聞こえる…、それでも聞きたい！！ちゃんと会って話を聞きたい！！

そう心の中で思うと、私は立ち上がって仕度を始めた。

## 第一話 眠りから解き放たれた少女（前書き）

私を思い出して！！何回も耐えた”はじめまして”

辛かった、苦しかった…でも、もういいよね？もう…いいんだよね

…

## 第一話 眠りから解き放たれた少女

足が進む、自分では止めることなどできないのではと思わせるほど速い。

焼きたてのパンの匂い…もうここまで来たのか、自分でもそう思った。

はあっ…はあ、はあ…はあ…つ。

喉が痛い、焼けるようにアツい…それでも喋らないと…聞かないと…弘人君に…

そう思った後に私の意識はふとそこで途切れた。

「…の……風乃…！！風乃！！…目を開けてください！！風乃！！！！」

ダレ？私の名前を呼ぶのは…

だるいの、もう…何年も頑張った。なのになんで君は思い出してくれないの？？

私頑張って明るく振舞った！なのに…なのに…

繰り返される”はじめから”。何度も…何度も…それはまるで螺旋階段のようだった。

もう…こんなに辛いことが繰り返されるなら…私も君のように忘れてしまおうか…そ「起きて！風乃！！君は忘れちゃいけないんだ…忘れたらこの時間は最初からなかったことになってしまっ…」嫌だ…そんなの嫌だ！！私の頑張って…頑張った時間がなかったことに

なつてしまふなんて嫌だ！！嫌だ！！！！

「ん……、弘人・君……？」

視界がだんだんと回復してくる。そのとき最初に映ったのは弘人君の顔で……次にはブレスレットだった……。

「凧乃！！よかった……だんだん呼吸回数と心拍数の減りが見えてきて……怖かった……」

「そんなことよりブレスレット……なんで……夢……なんで……？なんで……覚えて……？」

気づいたら泣きそうになっていた私。その言葉は支離滅裂でうまく伝えようと思っても伝えることができなかった。

「凧乃？……ブレスレット？夢？……」

私の言葉の断片を聞いてなにか考えている君の顔もだんだんとぼやけてきた……

ああ……そうか、なんでこんなに泣きそうなのか……嬉しかったんだ。現実の弘人君は私を覚えていてくれて……無意識に泣いていたんだ。そこまで心の奥に君が強く根付いていたなんて……でも……よかった。三年間は無駄になんかなってなかった。

「ブレスレット……つく……ひつく、う……うわああん、わあっ、わああん」

「ど、どうしました？凧乃……！」

ああ……おかしい、感情の制御ができない……でも、なんでかこの涙は気持ちが良いくて流し続けてもいいかななんて思った。

## 第2話 動き出した歯車（前書き）

ブレスレットの秘密。それはきっと...

## 第2話 動き出した歯車

やっと…落ち着いた。今度こそ聞かないと…

「弘人、君。」

「?…あ、そうだ。ボクも呼び捨てで構いませんよ」

「あ、そう?…じゃあ、弘人。……………」

よくよく考えたら夢の話は落ち着いてたって無理じゃない!!覚え  
てないのよ!?

しかもうまく伝えれる自信がない!!こうなったら…なにかほかの  
話でも…

「…ブレスレットは、どこで…そう、どこで?」

バカ!!これ前に聞いたじゃないっ(ビシッ!!

「これ…ですか?」

ほらっ!!困ってるじゃない!!まった「これは…7年前に祖父が  
らもらったんです」……は??

「屋台で買ったんじゃないくて??」

「え?あ、はい。」

「え??でも、それ私の(母の)屋台にしか売ってなかったはず…」  
そう…そうなのよ!なのに3年前じゃなくて7年前…おかしい…

「じゃ、じゃあ今、お祖父さんは?」

「…半年前に天寿を全うしました…」

……。

「待ってて…明日、明日また会いましょう!!」

「え?あ、凧乃!??」



いそいでうちに帰らなきゃ！！お母さんに・・・お母さんにこの話を  
して…ブレスレットは一体どこから来たものなのか聞かないと…！！

全速力のダッシュ。今回はもうばてたりしなかった。

走って玄関を開けて・・・お母さんの部屋に……着いた！！

「お母さん！！」

私はドアを乱暴に開けてお母さんに聞こう！！今度こそ事の真相を  
！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4447v/>

---

天の川が見えた8月

2011年10月9日10時17分発行